Journal of the Research Institute for
Old Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures
Vol. VIX 2024

日本古写経研究所研究紀要　第九号（令和６年）

智洞編『龍谷学黌内典現存目録』の特徴とその方向性

万波寿子

Characteristics and Directions of the Catalogue of Ryūkoku Gakko Naiten Genzon Mokuroku 龍谷学黌内典現存目録, edited by Chidō 智洞

Hisako Mannami

The five-volume "Ryūkoku Gakko Naiten Genzon Mokuroku 龍谷学黌内典現存目録" (Surviving Catalogue of the Ryukoku University School Library, billing code 000.1/63/5) is not only one of the largest Buddhist book catalogs of the early modern period, it is also a very unique one. It was compiled by the learned monk Chidō (智洞：1736-1805).

The unique arrangement of the books in the Ryukoku Gakkai School Catalogue of Existing Buddhist Scriptures is that they are arranged in line with Shinran's work Gubakusyo 愚禿鈔. It should be noted, however, that the focus is on Pure Land Buddhism, but not on Shin Buddhism. In addition, the compilation of such a large catalog, which represents a single Buddhist system, was made possible by Chido's knowledge of the Tripitaka of Jiaxing 嘉興蔵, which was housed at the school, and his incorporation of it into the catalog.

In fact, this arrangement of books was not the idea of Chidō alone. Originally, school libraries had a collection of Buddhist books centered on Pure Land Buddhism. Chidō took this arrangement of the school library, in other words, the academic foundation of the school, and developed it further.

The "Catalogue of Existing Buddhist Scriptures in the Ryugaku School" is a proposal for a new Buddhist system, almost a presentation of scholarly results. It does not emphasize the importance of authority. This was unique for the Nishi Honganji Order, which was aiming for centralization at the time.

Although the same book was hidden after the Sangou Wakuran 三業惑乱, there are later writings on it, from which it was found to have been frequently used in the school. It is said that this book was a very useful catalog for the school, which often used the Tripitaka. This indicates a part of the way of learning at that time. However, after the Meiji period (1868-1912), along with changes in the distribution of books in school libraries, Chido's achievements were forgotten.

Due to the Sangou Wakuran, Chido's reputation is not necessarily high today. However, "Characteristics and Directions of the Catalogue of Ryūkoku Gakko Naiten Genzon Mokuroku" is a good example of the characteristics of early modern Buddhism, which conducted research in a bibliographical manner. Chidō respected the scholarship of the school and sought to develop it. In this catalog, the culture of Buddhist texts in the early modern period is well represented, and at the same time, we can see his academic sincerity.

智洞編『龍谷学黌内典現存目録』の特徴とその方向性

万波寿子

はじめに

『龍谷学黌内典現存目録』五冊（龍谷大学大宮図書館所蔵　請求記号 000.1/63/5）は、近世最大の仏教教団である西本願寺が運営する学林（檀林）の蔵書目録である。正確な成立年は不明ながら、序文の年記には天明三年（一七八三）とある。編者は桃華坊智洞（一七三六～一八〇五）。彼は京都の浄教寺の僧侶で、寛政元年（一七八九）に学林の最高職である能化職を継いだ後、近世最大の宗教騒乱である三業惑乱の主要人物となり、幕府に糾弾され獄死した。

罪人とされた智洞であるが、彼の製作した目録は非常にユニークで大きな視野を持つ。それは単に、内典四五七七部、外典一二二部、総数四六九九部という、近世屈指の巨大な目録であるということに留まらない。

同書について筆者はこれまでいくつかの考察をしてきた。まず、『龍谷学黌内典現存目録』は学林の虫払（むしばらい。蔵書の虫干し）の際に利用された『大蔵虫払目録』と関係している。[1] この『大蔵虫払目録』については後にも触れるが、実際には虫払の際だけでなく、学林の僧たちの閲覧目録として利用されていたと考えられる。『龍谷学黌内典現存目録』はこれと書目の並びに一致するところがあり、それゆえ学林の蔵書の基礎的となったことをよく表した目録と言える。

さらに特徴的なのは、嘉興蔵大蔵経を内部に取りこみ、学林蔵書と合わせ自由に並べ替えて浄土教中心の仏教大系を示していることである。同書はあたかも日本人の著作を含めた新しい大蔵経のようであり、実際に、当時の西

図 1-1　智洞編『龍谷学黌内典現存目録』五巻表紙

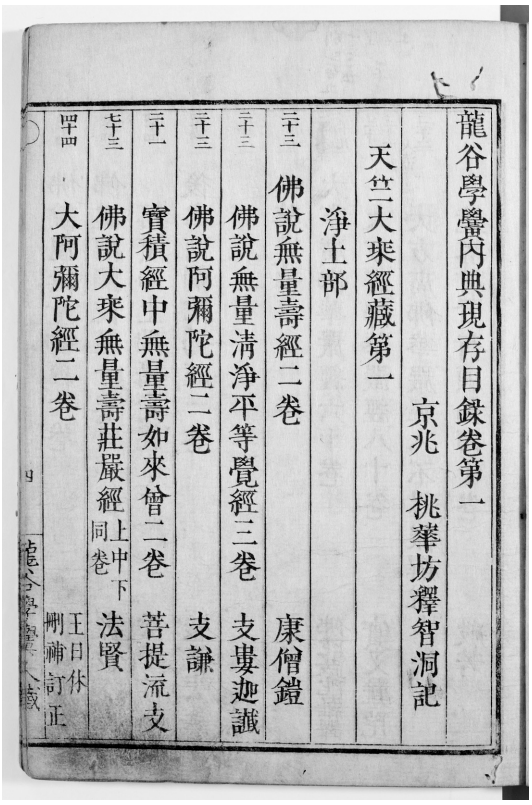
龍谷學黌内典現存目録卷第一
京兆　桃華坊釋智洞記
天竺大乘經藏第一
浄土部
二十三　佛説無量壽經二卷　康僧鎧
二十三　佛説無量清浄平等覺經三卷　支婁迦讖
二十三　佛説阿彌陀經二卷　支謙
三十一　寶積經中無量壽如來會二卷　菩提流支
七十三　佛説大乘無量壽莊嚴經上中下同卷　法賢
四十四　大阿彌陀經二卷　王日休刪補訂正
龍谷學黌大藏

図1-2　智洞編『龍谷学黌内典現存目録』第一巻冒頭

本願寺の碩学玄智はそういった大蔵経を望んでいたようである。[2]

総じて『龍谷学黌内典現存目録』は、当時の学林書庫を知る上で重要というだけでなく、その規模や全体が示している大系が特殊で、他に類を見ない目録と言えよう。

以上を踏まえ、本稿では同書についてさらに深く理解するために、以下の一～二について考えてみたい。

一　**書目の並び**：明の版本大蔵経である嘉興蔵大蔵経を檀林の蔵書と合わせており、しかもすべて浄土教を強く意識した独自の配置を採っている。この発想はどこから来たのか。

二　**智洞以前の蔵書の配架方法**：智洞が目録編纂をする以前の学林書庫の配架について、『龍谷学黌内典現存目録』から、おおまかな推測ができる。

三　**公刊の目的**：全五冊ともに写本であるが、第五冊を除いた四冊は版下風で、出版の意向があったと思われる。智洞はどういった方向性や動機をもってこれを公刊しようとしたのか。

四　**書き込みとその抹消**：第一～第四冊までは書き込みが多数あるが、徹底的に抹消されている。どのような書き込みで、なぜ抹消されたのか。

五　**大蔵経の頻繁な利用**：学林では嘉興蔵大蔵経が頻繁に利用されていたらしい。『龍谷学黌内典現存目録』五冊は大蔵経を含めた学林蔵書の探索に便利であるため、利用されたのではないだろうか。

一　書目の並び

『龍谷学黌内典現存目録』は、嘉興蔵大蔵経（正蔵、続蔵、又続蔵）を中に取りこんでいる。結果、天竺・震旦・日本と充実した書目となり、これらを浄土教中心に配置しているため、仏教全体を浄土教中心に体系化した体になっている点が特徴である。右に簡略にその書目の配置方法をを示す。

○　嘉興蔵大蔵経を含み、浄土教を中心に仏書を体系化。
○　全体をまず天竺・震旦・日本に経典をわかつ。
○　それぞれに大乗小乗の経律論を並べる。
○　震旦部と日本部では、それぞれ浄土教を筆頭とし、華厳部・天台部・真言部・禅部・三論部・法相部と続ける。

この書目の配置について、『龍谷学黌内典現存目録』の凡例には以下のようにある。

支那日本目録、釈経・釈律・釈論、皆先挙本部、於其下列其釈必不以宗分之至雑著。則宗分之、亦為令易見耳。其中先浄土者吾宗所基也。次、華天密禅三論法相等次第者、従禿鈔指南。

（傍線筆者）

傍線部に拠れば、中国と日本の書目については浄土教を最初として、その後に華厳、天台、真言、禅宗などと続けたとあり、実際、目録でもそうなっている。そしてこの次第は「禿鈔指南」に従ったとある。

ただし、「禿鈔指南」という書物はない。あるいは、これは親鸞の『愚禿鈔』のことかと思われる。『愚禿鈔』二巻は建長七年（一二五五）頃成立の親鸞の著作で、真宗依用の聖教のひとつである。このうち上巻が、諸宗を分類しながら真宗の教義を述べたものとなっている。その分類としては、まず仏教全体を大乗・小乗にわけ、大乗について詳しく分類している。中でも『龍谷学黌内典現存目録』の分類は、『愚得鈔』の教判「二双四重」を参照しているように見える。

「二双四重」では、まず真宗が属する「横超」があり、これは阿弥陀仏の本願により段階をへずに等しく真実報土に導かれる浄土易行の教えで、無量寿経および観無量寿経・阿弥陀経の隠説の弘願門の真実教として『愚禿鈔』ではこれを第一とする。そして第二に、「横出」これは浄土易行に含まれるが、真実の専修念仏によらず、人それぞれの気質や能力（機根）に応じて方便化土（真実の浄土である報土の周辺）への往生を願うもので、観無量寿経顕説の要門および阿弥陀経顕説の真門に示される方便の教えがあるとする。ここまでが浄土教である。

そして第三が、「竪超」で、これは即身成仏や本覚（人はもともと悟りの心をもっていること）を説き、すばやく悟りにいたる教えで、華厳・天台・真言・禅が実教（真実の教え）としてこれに属する。

最後が「竪出」で、悟りを得るまでに永劫ともいえる修行を要する権教（仮りの教え）である。浄土門法相・三論などがこれに属する。ただし、全体を嘉興蔵のように天竺・悉曇・日本の時代順にしている点は異なる。

つまり、浄土教を第一とし、その後に真言や天台、禅、華厳があり、そして法相や三論宗があるという順序である。これを見れば、『龍谷学黌内典現存目録』の書目の配置は、おおむね親鸞の考えに拠っているように見える。

ところで、『龍谷学黌内典現存目録』は、書式も嘉興蔵と全く同じ半丁一〇行で一行二〇文字で界線がある。嘉興蔵を模しているのは間違いない。智洞が右のような「二双四重」を体現できたのは、やはり学林依用の嘉興蔵を知悉していたからである。

この学林の嘉興蔵で忘れてはならないのは、入蔵した時期である。この入蔵時期については、以前筆者は延宝二年（一六七四）と推定した[3]。これは、嘉興蔵を底本とした日本ではじめての普及版大蔵経である黄檗版が開版される七年前のことである。そして、この延宝年間は、聖教伝授を排した宗主寂如と、文献主義を檀林に根付かせた第二代能化知空の時代であった[4]。嘉興蔵の入蔵は、学林における文献主義への転換の流れの中で理解されるべきものであろう。智洞は、この嘉興蔵を大いに利用している点は留意される。

また、もう一点、同目録の書目の配置には特徴がある。浄土教を第一に配置しているが、浄土真宗を第一とはしていないことである。通常の目録ならば、『浄土三部経』など天竺や支那の浄土経典を挙げた後は、親鸞の主著である『教行信証』を配する。しかし、同目録では天竺・中国・日本と大別し、天竺の部に日本人の著作は混じらないのに加えて、各国ごとにさらに細かく経律論に分かたれ、それぞれに浄土教の書目が成立順に配される。よって、『教行信証』は日本の浄土部に入ることになり、源信の『往生要集』や法然の『撰択集』の後となる。目録の中でかなり後方である。

総じて『龍谷学黌内典現存目録』は、親鸞中心ではなく、全体として親鸞の考えに沿った形での浄土教中心の通仏教的な仏教大系を示した目録と言える。

二　智洞以前の蔵書の配架方法

『龍谷学黌内典現存目録』はユニークな目録ではあるが、実は、これは智洞ひとりの発想ではない。結論を先に述べるならば、この性質は学林が元々持っていた性格を発展させたものと推定できる。その根拠は、嘉興蔵以外の書目の上に付された函番号の並び方である。

当該目録は、大蔵経とそれ以外の大量の仏書を独自に配置しているのだが、各書目の上部に、「蔵」（嘉興蔵のこと）や「続蔵」（嘉興蔵の続蔵）、「肆」（版本）、「写」（写本）といった大まかな分類と、書庫での函番号が記されている。

これを見るに、もともと嘉興蔵もそれ以外の仏書も書庫では函に入れられていたとわかる。そして、函に付された番号順に並べられていた。また嘉興蔵は別置されていたのだろう、函番号は別立てである。また、嘉興蔵以外の仏書を入れるのに「肆」と「写」の二種類の函があったようにも見えるが、同目録が編纂されて後、さらに増加した蔵書に対応するため写本が別函に写されるようになったことがすでにわかっている。[5] よって、この目録の成立当時は版本も写本も同じ函に入れられており、函に版本の函と写本の函が二種類あったわけではない。「写二」とは、肆本二番の函の中にある写本という意味である。以上を踏まえた上で、右の『龍谷学黌内典現存目録』第三巻の本文冒頭を見てみよう。第三巻は、「支那大乗釈教部」から始まる。主に嘉興蔵以外の学林蔵書が配置されている巻である。

龍谷学黌内典現存目録巻第三　　京兆　桃華坊釈智洞記

支那大乗釈経部

肆一　三部経本　科本　四巻

肆一　同異訳経本八巻

大無量寿経

肆一　義疏二巻　隨　慧遠

肆一　義疏一巻　唐　嘉祥

肆一　連義述文讃三巻　唐　憧興

肆一　宗要一巻　新羅　元暁

観無量寿経

肆一　義疏二巻　隨　慧遠

蔵百七十六　疏一巻　隨　智顗

肆一	記一巻	唐	法総
蔵百七十六	妙宗鈔一巻	宋	智禮
肆一	疏一巻	唐	吉蔵
肆一	疏四巻	唐	善導

（中略、「肆一」の函の書目が続く）

阿弥陀経

肆一	疏一巻　附千日本恵心小経畧記	隨	智顗
写一	疏一巻	唐	窮基
肆一	通賛三巻	同	
蔵百八十四	疏一巻	新羅	元曉
肆一	義疏一巻	宋	元照
肆一	聞持記三巻	宋	戒度
続四十	句解一巻	元	性澄
続五十六	疏鈔四巻	明	袾宏
肆一	事義一巻		

（中略。「肆一」の函の書目が続く）

華厳経

肆二	捜玄記十巻　四之本欠	唐	智儼
肆二	孔目章四巻	同	
写二	明宗記一巻		修寂
肆二	文義綱目一巻	唐	法蔵
肆二	探玄記二十巻	同	

（以下、嘉興蔵の正蔵と続蔵に混じり、「写二」「肆二」の函が続く。）

嘉興蔵の正蔵や続蔵を除くと、「肆一」や「写一」、つまり嘉興蔵以外の仏書の一の函からはじまっており、二函へと続いている。これ以降、多少番号が前後する箇所があるが、おおまかには函番号通りになっており、大幅にずれることはない。これは『龍谷学黌内典現存目録』全体に言えることである。このことは、学林の蔵書が智洞以前から浄土教を中心とした通仏教的な配架を持っていたことを示している。

なお、こうした配架方針では、『教行信証』も例外ではなかった。親鸞の主著『教行信証』は「肆七十八」の函（版本の七十八番の函）。同じ函には『往生要集』や『選択本願念仏集』が入れられている。そして確かに、『龍谷学黌内典現存目録』では『往生要集』や『選択本願念仏集』後に『教行信証』（「広文類」）が並べられている。この版本の七十八番函は、華厳経などよりかなり後の函。『華厳経』関係は四十七函で、『浄土三部経』関係の日本の部四一～四六函の次に配置されている。つまり、学林書庫では、もともと宗祖の主著『教行信証』もかなり後の方に配置されていた。

こうした配架がいつ頃からなのかは不明だが、西本願寺檀林の書庫は智洞以前から浄土教を中心とした配架をしていたのだった。智洞は目録を編纂するにあたり、この方針を踏襲したのである。彼自身の発明は、主にそこに嘉興蔵を入れ込んだことであろう。その上で全体を整えて巨大な目録を作ったのであった。

三　公刊の目的

『龍谷学黌内典現存目録』五冊のうち、第五冊は別人が後から作った写本目録である。今これを除外して考えると、智洞が作成した四冊は嘉興蔵大蔵経を意識した書式であり、書体もよく整っておりいかにも版下風である。このことから、智洞には出版する意志があったと推測できる。しかし、三業惑乱があり、出版は果たされなかった。現在確認されている同書の写本も、近世のものである可能性があるのは四点のみで、非常に少ない。

同書が刊行を予定していたならば、それは当時にあってどういった目的や方向性を持つものであっただろうか。

【西本願寺の中央集権化】

当時、まず書物の関係で注目されるのは、西本願寺の聖教蔵版である。いわゆる御蔵版と呼ばれるもので、氾濫する町版に間違いが多いとして、西本願寺自らが聖教出版を行ったものである。

その嚆矢は明和二年（一七六五）開版の『真宗法要』である。宝暦年間より、激しい抵抗をした民間の本屋との五年の交渉を経て、真宗の聖教類のうち三十九種類の真宗の仮名聖教を選び、開版した。本文を厳密に校訂し、版木も新しくした大規模なものであった。その洗練された版面は、本山の権威を感じさせる。三十一冊の仮名聖教叢書という大規模な事業であった。この『真宗法要』の開版は、東本願寺や当時は末寺であった興正寺を刺激することとなり、熾烈な聖教開版争いに発展し、真名聖教の『教行信証』の版権獲得争いの引き金になった。[6]

また、聖教出版とは別に、天明四年（一七八二）には西本願寺教団初めての宗史『本願寺通紀』の編纂に着手している。当時は学林の長たる能化に権力が集まり、教学が花開く一方で、北陸を中心に異安心が多発していた時期で、三業惑乱が間近に迫っていた時期でもあり、宗史の編纂は『真宗法要』と合わせ、真宗の聖教出版の独占を図り、中央の権威を強調したものであろう。

【東本願寺の開かれた学問】

西本願寺が中央集権化する一方で、西本願寺と双璧をなす東本願寺には開かれた学問が展開されていた。真宗の聖教出版では西本願寺と争っていた東本願寺だが、宝暦十年（一七六〇）、東本願寺では大蔵経の校合が行われたことが『上檀間日記』から伺える。

一　唐本之経蔵種々ニ而廿余り有之由。其中ニ而随分宜キ経蔵を開板仕候ハ、黄檗之本ニ御座候。学寮ニ御座候蔵経者甚不次第なる本ニ而、且又黄檗之経蔵とくらへ合候得ハ、百拾三部不足之様ニ相見へ申候。（中略。黄檗蔵の本で経蔵の不足を補った。また他の大蔵経を調べた結果黄檗蔵にない経典が七十一部見つかり、しかしこれは東本願寺書庫にあるので目録を作ることにした。黄檗版に不足の本の目録を）是ハ末々続蔵と相立、目録相添置申候ハ、可然哉と奉存候。（以下略）

（『上檀間日記』安永三年九月二十九日、慧琳の上申書。[7] 句読点、（　）筆者）

安永年間には黄檗版大蔵経に漏れた経典を「続蔵」と称し、その目録が作られている。また、蔵書において大蔵経が重視されていたことがわかる。校

合した大蔵経は他山他派にも公開された。

また、東本願寺檀林では蔵書を整えるだけでなく、講義の在り方も見直された。講義は公開され、他宗の学僧でも参加できたという。教学上、清新な体制が整いつつあった。ただし、こうした体制は、「続蔵」目録や大蔵経と共に不幸にも天明八年正月晦日の大火で烏有に帰した。[8]

【大蔵経への関心】

また、黄檗版大蔵経が開版されて約百年が経過し、忍徴や鳳潭がこれを検証して以来、智洞の時代にも大蔵経への関心は保たれていた。

天明元年（一七八一）、当時西本願寺の末寺であった興正寺の学頭大瀛が『閲蔵知津抜萃』一巻を刊行し、また翌天明二年には、天台僧智旭編『閲蔵知津』四十四巻二〇冊（順治十一年〈一六五四〉成立）が天台僧慈舟によって単独刊行されている。

そもそも、江戸時代前期の終わりにあたる延宝年間前後は、西本願寺教団のみならず、版本で文献主義的に研究を行い、知識を共有し合う新しい仏教学が十分に意識されてきた頃だった。その中で黄檗版大蔵経の開版はシンボル的な出来事であった。黄檗版はそれまでの信仰や音読、転読のための大蔵経とは事なり、極めて読書や研究に向いているのである。

黄檗版は明の嘉興蔵大蔵経を底本としている。この大蔵経はそれまでの版本大蔵経とは異なり冊子体で、目録も備わっている。しかも、個々の経典に千字文による通し番号も付され、版面は半丁二〇行、一行十七文字で統一されているので検索や引用も容易である。これに加えて黄檗版はほとんどの本文に訓点を施している。こうした仏書の需要が当時高かったことが窺われ、実際、この大蔵経は近世を通じてよく普及した。

西本願寺の学林も、黄檗蔵の開版前にその底本である嘉興蔵を入蔵し利用してきた。版本大蔵経を内包した仏書目録を公開を前提として編纂することは、あり得ることであろう。

当時は三業惑乱につながる応酬がしだいに激しくなっており、本山と在野の対立が起こっていた。本山としては教団内でその権威を高める必要があった。『真宗法要』は学問にももちろん有効ではあるが、それ以上に、正式な真宗聖教のテキストを本山が掌握し、自ら出版することは宗教的権威を高める意味合いが強い。

このような中で、『真宗法要』の次の世代を担う智洞であったが、このような中央集権化とは少し方向性を異にしている。『龍谷学黌内典現存目録』は、真宗中心にした蔵書目録ではない。近世で作られた文献主義的な仏教学に基づいた学林蔵書の歴史を踏まえ、より体系的に発展させたものを世に問うものである。同時に、長く学林蔵書の規範となるものとして作成されたと推測される。

四　抹消された利用の痕跡

『龍谷学黌内典現存目録』の第一～第四冊は、嘉興蔵と同じ罫紙に版下風に書かれているため、全体として整然とした印象である。しかし、よくみると全体的に相当に手が加えられている。一目見て気付くのは、別筆の書き込みとその抹消である。墨、朱で少しずつ書き込まれている箇所が至るところにあるのだが、それらは全て胡粉や貼り紙でひとつひとつ抹消されている。後からの書き込みを全て隠しているのである。

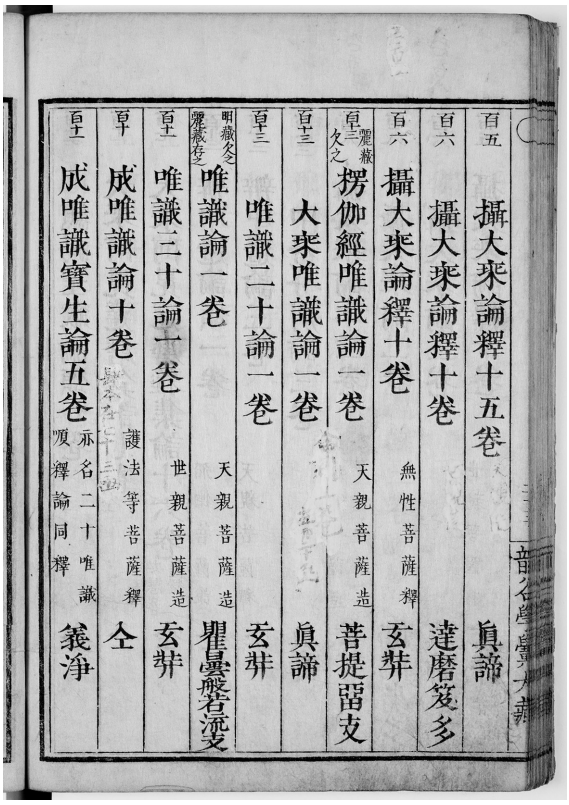

図 3-1　胡粉抹消箇所

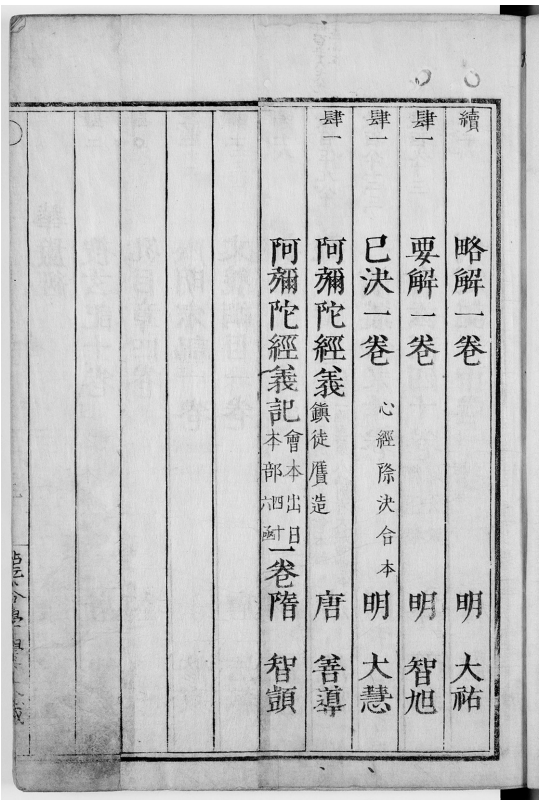

図 2　料紙が切り継ぎされた箇所

また、料紙の途中が切り取られ、新しい白紙の料紙で貼り継がれている箇所が至る所にある。その際、この白紙の料紙は、元のものと同じ「龍谷学黌大蔵」と版心にある罫紙を使っている（図2）。おそらく切り取られた部分には何か書いてあり、それを見せないよう同じ罫紙の白紙を貼り付けたものと思われる。

切られた部分に何が書いてあったかは知りようもないが、胡粉で抹消した箇所の中には読むことができるものがある。例えば、第二巻の、主に嘉興蔵大蔵経の書目が並んでいる巻に、「百　成唯識論十巻　護法等菩薩釈造　同」（「同」は前の行と同じという意味で、ここでは「玄奘」を指している）と書かれた行がある（図3-1）。当然ながら、これは嘉興蔵正蔵の第百番の函に『成唯識論』十巻が入っているという意味である。この行にも「護法等菩薩釈造」の文字の左あたり書き込みがあり、「肆本在七十三函」と読める（図3-2）。胡粉で抹消されているが、それが薄いために下の文字が判読でき、明らかに別筆である。この「肆本在七十三函」という書き込みは、嘉興蔵の第百函の『成唯識論』のほかに、版本の七十三函にも同じ本があると示唆しているの

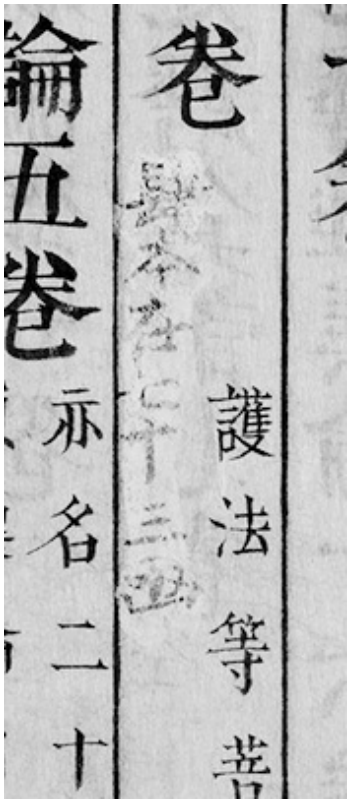

図 3-2　抹消箇所の拡大図

だろう。

実は、先述の『大蔵虫払目録』から、当時の学林蔵書には町版の『成唯識論』が入っていたことが確認できる。『大蔵虫払目録』は文政年間と文久年間頃の二種類が残されているが、そのいずれにも七十三函の項に『成唯識論』十冊本が記載さ入れている。

こうした例は他にも多く見られ、智洞没後に入蔵した書目も書き込まれている。たとえば、第三巻の「目録」の項には貼り紙で抹消した行があるが、そこには「肆三十四　三大蔵目録二巻　随天」と書かれている。これは智洞が没した後の文政二年（一八一九）頃刊行の版本である（図4）。

こうした書き込みが示すのは、『龍谷学黌内典現存目録』の成立以後智洞が罪人として獄死した後も、同目録には新しい情報が書き込まれ続けたということである。そして、その書き込みはいつの時点かで徹底的に抹消された。

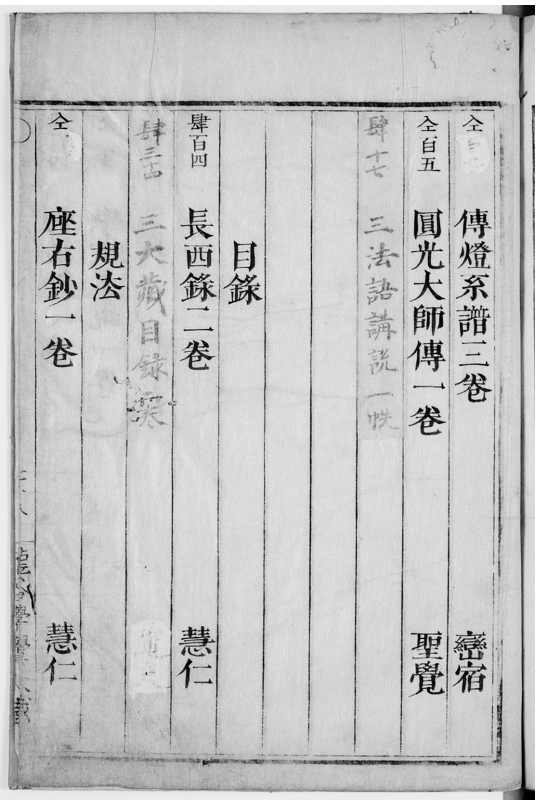
全　傳燈系譜三巻　齋宿
全百五　圓光大師傳一巻　聖覺
肆十七　三法語講説一帙
目録
肆百四　長西録二巻　慧仁
肆三十四　三大蔵目録　規法
全　座右鈔一巻　慧仁

図4　第三巻抹消箇所

念入りに抹消していることを考えると、料紙を切り取り白紙で補った箇所も新しい書目が書き加えられていた可能性が高い。

同書にはよく読まれた証である手ヅレ（見開きにした時、本の左下に付く汚れ）が濃く出ていることと合わせて考えれば、ある時点までは学林の目録として頻繁に利用されていたと結論付けられる。そして、罪人の著作を利用し続けていたことを隠す必要ができた時、抹消作業が行われたのだろう。

【僧朗の写本目録は文久年間に利便性のために合綴されたか】

現在は一具とされている第五冊の「龍谷学黌内典写本現存目録」であるが、これは享和元年（一八〇一）に学僧僧朗（一七六九～一八五一）が編纂した写本目録である。智洞の『龍谷学黌内典現存目録』から写本を抜き書いたもので、書式も作者も別であるにも関わらず一具とされたのは、やはり写本だけの目録があった方が便利だったからであろう。

智洞は学林蔵書の充実にも力を入れ、その数は飛躍的に増加したが、そのために装訂に規格性がない写本を別函にわける必要が出てきた。写本が別の番号を付された函に納められると、『龍谷学黌内典現存目録』四冊では把握しにくくなるので、これを補う意味で一具としたのだろう。『龍谷学黌内典現存目録』が頻繁に利用された可能性を高めるものである。

なお、この写本目録にも増補がある。僧朗の識語の後、さらに「外六十三四」と「百七十九」の函番号の二点の書目が挙げられているが（図5）、外典の六三函や一七九函が作られたのは幕末である。こちらにも新しい情報を書き加えているのだ。そして、作者が僧朗であるため、他の四冊とは異なり抹消作業は施されなかったのだろう。

以上をまとめると、『龍谷学黌内典現存目録』は、幕末まで学林蔵書とし

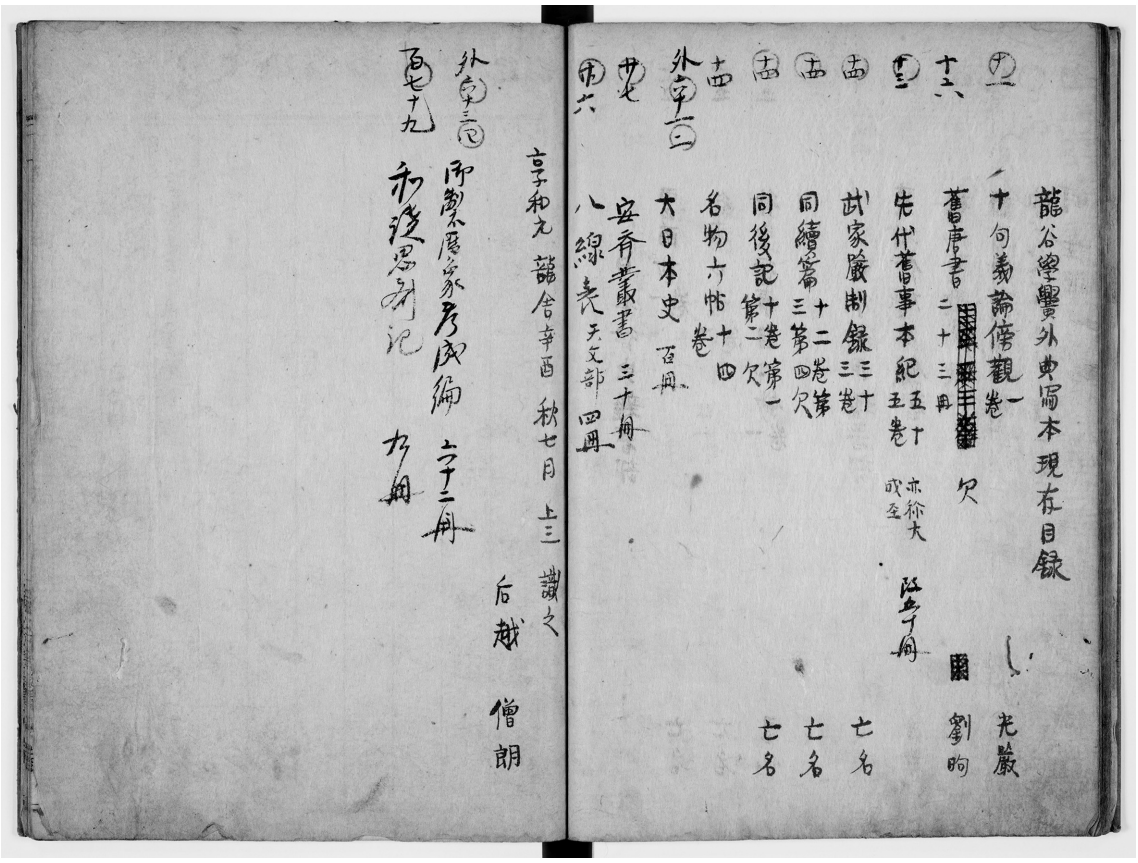

図5　第五冊巻末識語

ては扱われていなかった。しかし、檀林書庫の配架をより進化させ、嘉興蔵まで入れ込んでいる『龍谷学黌内典現存目録』は、実際には頻繁に利用され、増補を重ねていた可能性が高いのだった。

増補が抹消されたのはいつ頃であろうか。ひとつ考えられるのは、同書が学林の蔵書として復活した時である。三業惑乱で智洞が罪人となるに及び、『龍谷学黌内典現存目録』は秘匿されたと言われており[9]、確かに文政年間の『大蔵虫払目録』には記載がない。ただし、『龍谷学黌内典現存目録』の表紙には「共五／写／三十七函」と墨書されている。写本の三十七函は、文久二年（一八六二）頃成立の『続大蔵虫払目録』（文久年間頃成立の『大蔵虫払目録』の続編）の写本の項の最後に掲出されている。よって、文久二年頃には学林蔵書として認められたらしい。学林の蔵書に加えられるタイミングで抹消したのかも知れない。

五　大蔵経の頻繁な利用

筆者は以前、学林の大蔵経目録が破損するほど閲覧されている例を示した[10]。あまりに利用が多いため破損したので、嘉永四年（一八五一）に新調された目録『大明三蔵聖教目録』（龍谷大学大宮図書館所蔵　請求記号 201. 1/55）もまた相当な使用感があるのだった。学林の学僧らが大蔵経をよく閲覧していることが伺える。

ここにもう一点、『三蔵録』という本がある（龍谷大学大宮図書館所蔵　請求記号 201. 1/7-w/8）。幕末に学林書庫に入蔵した、八冊の写本である。その見返しには「依頼／安政五戊午年四月入蔵／願人　肥後玄覚」（安政五戊午年は

一八五三年)、奥書には「嘉永四亥初秋十五日行年七十六歳法臈二十／五夏於窓前投筆　円覚寺隠居釈教瑞玄覚」とある。すなわち、玄覚という老僧が書写して寄贈したもの。この玄覚については、肥後の僧侶で一名教端、称与楽庵といい、環中の門人であったとしか伝わらない[11]。

同書は大蔵経を閲覧するのに便利であるとして学林蔵書に加えられたものである。学林の記録である『学林万検雑牘』巻十八に、以下のように記載がある[12]。

口上書

一此度三蔵録壱部　八冊

是迄開元録等之蔵経目録数本御座候得共、急務ニ三蔵吟味之説、繰出し候ニ難儀仕候間、いろは引ニ仕、初学之便用ニも相成申候半歟と、年来編集仕候間、今度入蔵仕度、此段奉願候以上。

安政五午四月　　肥後八代　玄覚花押

学林
御役所

学林には『開元釈教録』などの大蔵経目録があるものの、素早く大蔵経の中から目的の経典を見付けるのは難儀であるから、書目をいろは順に並べれば初学の人も便利であろうと、この目録を年来編集していたので、今回学林に入蔵したいと述べている。

確かに、図六の本文冒頭では、経典名が「以」(い)ではじまる書目から列挙されており、いろは順に並べられている。また、嘉興蔵の経典であれば欄外上部に対応する千字文が書かれている。それだけではなく、訳者や偽経についても詳細に調査されており、知識の多くない者でも大蔵経から目的の経典を見付け、かつある程度の基礎的な知識も得ることができる。

料紙は『龍谷学黌内典現存目録』と同版の罫紙を使用している。学林もまた、円覚のこの書を必要としたことの表れであろう。この罫紙は、『大

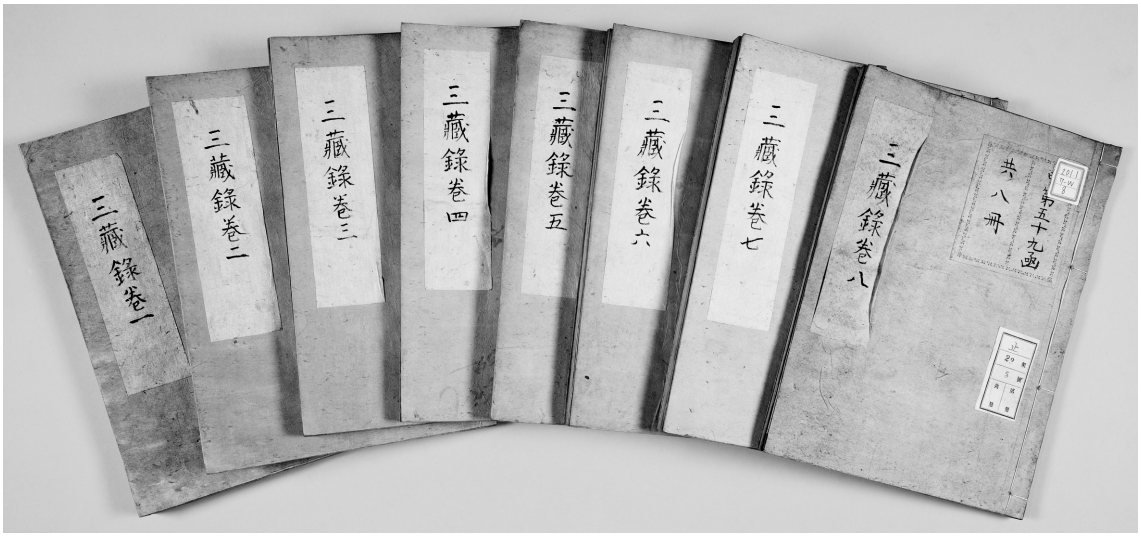

図 6-1　『三蔵録』(龍谷大学大宮図書館所蔵)

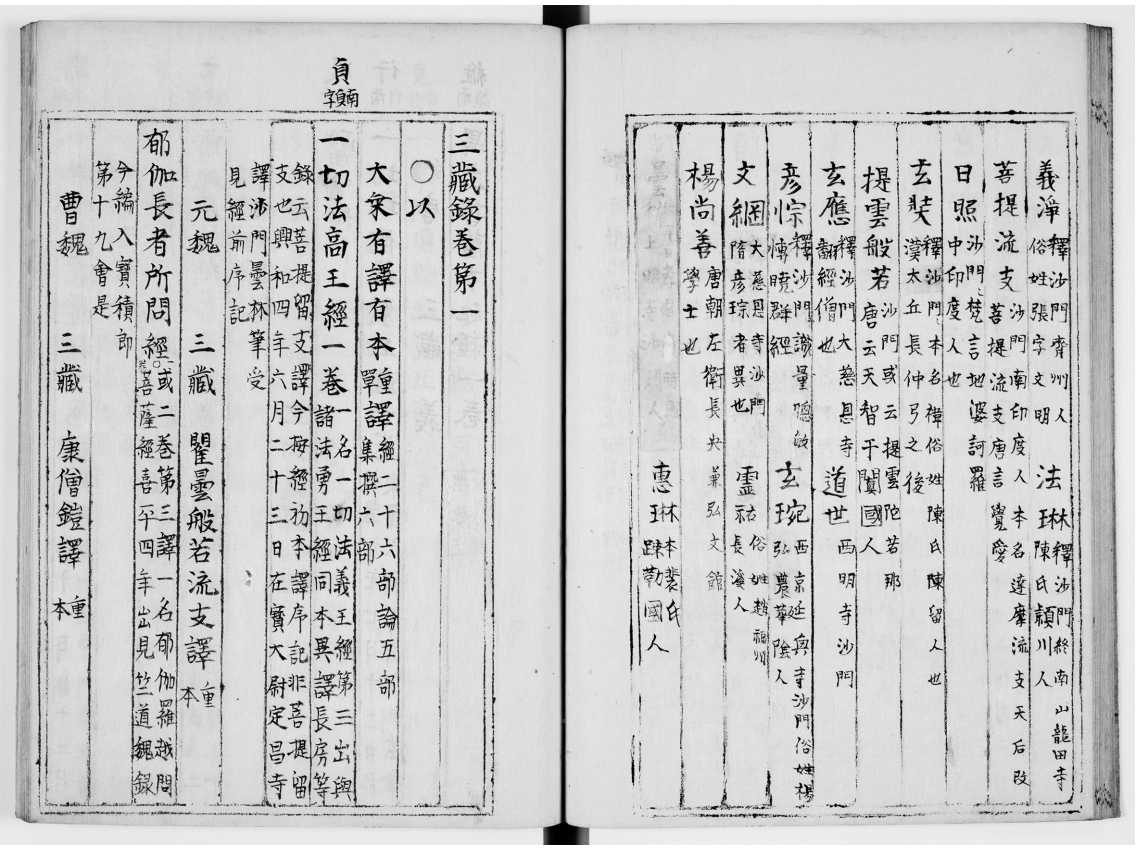

図 6-2 『三蔵録』本文冒頭

蔵虫払目録』にも使われている。そして、これらはいずれも書目を便利に探索することに利用されていた。

学林は、三業惑乱で罪人となった者の編著であっても、虫払用に作られた目録であっても、地方の一学僧が作った目録であっても、利用に便利であれば使用しているのである。ここからも、学林が大蔵経を前提とした通仏教的な在り方が窺える。

おわりに

以上をまとめると、まず『龍谷学黌内典現存目録』における独特の書目の並びは、親鸞の『愚禿鈔』に沿う形をしている。ただし、浄土教中心であっても、浄土真宗中心ではない点は留意される。また、こうしたひとつの仏教体系を示すような目録編纂が可能であったのは、学林依用の嘉興蔵大蔵経を知悉し、これを目録内に取り込んだことが大きい。

こうした書目の配置は、智洞一人の発想ではない。もともと、学林の書庫では浄土教中心の通仏教的な仏書の配架を行っていた。智洞はこうした学林蔵書の配架、ひいては学林の学問的基盤を踏まえ、それをさらに発展させたのである。

中央集権化を目指していた当時の西本願寺教団にあって、『龍谷学黌内典現存目録』は、直接的には学林の蔵書目録の発表であり、新しい仏教体系の提案であって、学問的な成果発表に近い。『真宗法要』などに比べて権威の強調には重きを置いていないようである。

三業惑乱以降秘匿された同書であるが、後世の書き込みを見るに、学林内

で頻繁に利用されたようである。書き込みは現在抹消されているが、これは幕末以降と考えられる。大蔵経をよく利用していた学林では、同書は『大蔵虫払目録』と合わせ、学林の者達には大変便利であったのだろう。当時の学林教学の在り方の一端を示している。

明治前半成立と思われる学林の蔵書目録『真宗学庠蔵書目録』十二冊は、分類も函番号も近世のそれとは全く異なったものとなっている。すなわち、今日よく目にする『三部経』とその註釈書の後に、親鸞の著作が並ぶものである。[13] この目録以降、近世の書物文化の上に確立された学林書庫の配架と共に、智洞の功績は忘れられていったのだろう。

三業惑乱があり、今日必ずしも評価の高くない智洞であるが、『龍谷学黌内典現存目録』における学問的に真摯な態度は称賛されるべきものではないだろうか。同時に、早い時期に嘉興蔵を入蔵させ、文献主義的な研究を支え続けた学林書庫も、図書館学などに寄与するのはもちろんのこと、近世仏書がもたらした文化の特色のひとつとして、再検討されるべきものであろう。

この論文は、二〇二二年十一月十二日（土）国際仏教学大学院大学主催の公開研究会での発表を元に執筆しました。

注

（1）万波寿子「近世檀林の蔵書目録と書庫―西本願寺檀林の大蔵虫払目録―」（『国際仏教学大学院大学紀要』二六号、二〇二二年）

（2）万波寿子「智洞編『龍谷学黌内典現存目録』の研究」（『日本古写経研究所研究紀要』第七号、二〇二一年）

（3）同前論文

（4）三浦真証「『教行信証』伝授の一試論―寂如上人御講義を通して―」（『真宗学』一四〇号、二〇一九年）

（5）前掲論文（1）「近世檀林の蔵書目録と書庫―西本願寺檀林の大蔵虫払目録―」

（6）万波寿子「日本の仏書」（藤本幸夫編『書物・印刷・本屋―日中韓をめぐる本の文化史』勉誠出版（二〇二一年）

（7）『上檀間日記』は現在閲覧が難しいため、武田統一『真宗教学史』（平楽寺書店　一九四四年）より引用。

（8）武田統一『真宗教学史』（平楽寺書店　一九四四年）一五六ページ

（9）平春生「『〈龍谷学黌〉大蔵内典現存目録』について」（天野敬太郎先生古稀記念会編『図書館学とその周辺―天野敬太郎先生古希記念論文集』天野敬太郎先生古稀記念会、一九七一年）

（10）前掲論文（1）

（11）井上哲雄著『真宗本派学僧逸伝』（永田文昌堂、一九七九年）

（12）『学林万検』十八巻：龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史』史料編第二巻（一九九一年）収載

（13）前掲論文（1）「近世檀林の蔵書目録と書庫―西本願寺檀林の大蔵虫払目録―」